

コメディリック第2回「ただのホラー」

「これで幸せ」

登場人物

白石 シロスコフ

齋藤 野彦

※齋藤、白石、板付き

【L・明転】

ビーチで浮かれる二人

齋藤 「おい見ろよ白石、あの子、超可愛くない？」

白石 「うほーマジだー。齋藤、ちよつと近づいてこいよー！」

齋藤 「俺はいいよえへへ…うう…うう…」

突然泣き始める齋藤

白石 「…齋藤？齋藤？」

齋藤 「…ごめん…」

白石 「どうした？ライフセーバーの人呼ぶ？」

齋藤 「いや…違うくて…」

白石 「クラゲ？でも海入ってないよな？」

齋藤

「その…俺らさ…もう7時間このままじやんか？それが悲しくなってきた…」

白石

「このままってのは？」

齋藤

「いや…その…ナンパもせずただ7時間水着の女の子じろじろ眺めてはしゃいでるだけで」

間

齋藤

「普段女の子のお尻の皮膚とかVラインぎりぎりのきわどい皮膚の折り込み線とかそういうの見る機会無だから嬉しいよ、嬉しいけど…ナンパどころか、近くことすらできなくて…この人生終わってんなって」

間

齋藤

「…正直、この人生が怖い…」

白石

「齋藤、お前、まだそんなとこにいないの？」

齋藤

「そんなとこ？」

白石

「ファーストステージ。まださ、女の子とああやってビーチバレーしたり、ああやってBBQしたいか思ってたんの？」

齋藤 「思ってるよ」
白石 「浅い！浅いよ！齋藤」
齋藤 「え？」
白石 「俺はとづくにそのステージ越えてるから！」
齋藤 「俺、馬鹿だし、泣いてるから詳しく説明してくれないかな？」
白石 「なーんとも思わないよ。俺はあれ見ても。本当に！本当になんとも思わない。本当に！本当に！蝉と一緒！蝉と！ただおっぱいの大きい蝉と黒くてピアスつけてる蝉がミーンミーンって鳴いてる状態。うん。そんな感じ！」
齋藤 「え、白石は海で女の子と遊びたいとか思わないの？」
白石 「思わないよ！だって無理じゃん！海でも無理だし陸でも無理だよ」
齋藤 「白石はそうかもしれないけど」
白石 「お前、知らないうちに俺を下に見てたな？」
齋藤 「そんなこと無いよ。つい口が滑っただけ」
白石 「口が滑るってそういうことだろ」
齋藤 「え、俺もやっぱ無理なのかな？」

白石 「やっぱとかじゃなくて無理なの！お前も無理。無理・ザ・サンキューマル。そんな感じ！」
齋藤 「：そんな言い方無いよ」
白石 「齋藤、今お前が言ってることって、自分でネットも繋げないくせにステイブ・ジョブスになりたいって言ってるよ。うなもんだよ」
齋藤 「ええ」
白石 「ドレミまでしか音階出せないくせにマライア・キヤリーになりたいって言うようなもんだよ」
齋藤 「ええ」
白石 「妖怪のくせに早く人間になりたいって言ってるようなもんだよ」
齋藤 「止まんないじゃん」
白石 「止まんないよ。だってお前が女子と海で遊びたいなんて願う状況ってわかりやすく言えば「絶望」「絶望」なの。世の中の「絶望」の出来事を例えれば全て今のお前に当てはまる。絶望と刻まれた細胞、乱暴な欲望でお前は死亡。アーイ。そんな感じ」

齋藤 「…うう…うう…（ぐすぐすと嗚咽するくらい泣き始める）」

白石 「…齋藤。良いんだよ。命がある。お前にも命があるから。手首触ってみ？ドクドク言ってるだろ？」

齋藤 「うん」

白石 「醜くても心臓って働くんだよ。心臓だけじゃない。臓器みんな働いてる。命がある。臓器がある。それだけでいいじゃん？俺ら何かそれだけでいいからな？」

齋藤 「…女の子と遊びたい…」

白石 「…ダメ！」

齋藤 「女と遊びてえよ…」

白石 「……ダメ！」

齋藤 「うう…おっぱい揉みたいよ…」

白石、自分の二の腕をすっと差し出す

白石 「二の腕つてき、おっぱいと同じ柔らかさなんだよ」

齋藤 「…え、いいの？」

白石 「いいよ。仲間だろ」

齋藤 「（泣きながらゆっくりと白石の二の腕を揉む）ありがとう…ありがとう…」

白石

「（通行人へ）何それ？カメラ？いいですよ全然。インスタに上げるんですか？ツイッター？ですよねー目線だけお願いしやす」

間

白石 「…少しは落ち着いたか？」

齋藤 「落ち着いた」

白石 「いま、カメラで撮られて、ツイッターに上がってると思う。撮ってた女の子可愛かったなあ」

齋藤 「え、マジ？」

白石 「うん。ほらあそこ、ケツだけ見えるけど」

齋藤 「うわーいいケツしてるなあ！」

白石 「割れてるぞ」

齋藤 「割れてんなあ。すっげー…」

白石 「…な？…齋藤、これで幸せじゃんな？」

齋藤 「…うん」

白石 「女の子のケツが割れてるってだけで、これだけ盛り上がるってマジ才能だと思っよ」

齋藤 「そうなのかな？」

白石

「そうだよ！齋藤！高望みしないで早く俺のいるステージに上がってこい」

齋藤

「…うん。わかった。俺が間違ってたわ」

白石

「いいか…齋藤？全て諦める。全てだ。全て諦めろ」

齋藤

「うん…全て諦める」

白石

「…生まれ変わったら沢山おっぱい揉めるように今は徳を積んどこう。な？」

齋藤

「うん！白石、ありがとうな！」

白石

「(にっこりして) バーロー」

齋藤

「白石、あのさ…二の腕」

白石

「ああ、いいよ。ほら」

齋藤

「(二の腕を揉み) はー落ち着く」

白石

「(ニコニコしながら自分で自分の二の腕を揉む) もう夏も終わりだねー」

齋藤

「そうだねー」

【し・暗転】

—了—